

関 恵 芬 先 生 を 偲 ぶ

日本二胡振興会会長 武 楽群

千年以上の年月を経たとされる「陽関三疊」のメロディーは、2014年5月24日の東京亀戸カメラホール「琴縁弦和・東西南北二胡コンサート」での最初の演目であり、演奏する私は特別な心情だった。なぜなら？恩師関恵芬の告別式も中国上海龍華殯儀館で同じ24日に行われているから。「陽関三疊」を演奏しながら私の気持ちはその旋律と共に海を越え、関先生の傍に飛んでいったようだった。関先生、この日、東京に私の演奏を見に来ると約束したのに・・・

私の小学校四年の時に中国文化大革命が起こり、西洋音楽をはじめ、外国及び中国古典音楽でさえも禁じられ、物質だけではなく音楽も極めて貧しい時代だった。子供の私の大事な楽しみはラジオ放送の僅かな音楽だった。二胡の「紅旗渠水繞太行」、「喜送公糧」、「江河水」などみんな関先生のオリジナルの演奏で、学校に通う途中、そのメロディーを口ずさみ、時々大きな声で走ったことを今でも覚えている。

文化大革命後、二胡音楽は中国経済の発展と共に急激に変わって、新作品はどんどん創作され、作品の多様化、演奏テクニックの充実、二胡音楽は想像以上に豊かになった。その中で私が特別に好きな曲は関先生が古曲を編曲した「陽関三疊」だった。そのメロディーを聴く度に「勸君更進一杯酒、西出陽關無故人」と、唐の詩人王維の詩が浮かんでくる。私が関先生に最初に習ったのも「陽関三疊」で、レッスンの間にご主人が作った手料理をご馳走になったことを今思い出せば昨日のような光景である。

日本で関先生のコンサートを開きたい、より多くの日本人に関先生の素晴らしい演奏を聴いてもらいたいという気持ちは来日後に益々強くなり、「2005・二胡縁」日本二胡振興会設立記念コンサートを機に関先生を招聘し、東京オペラシティで私の長年の夢を果たした。続いて仙台、大阪と、三会場で延べ三千人余り、関先生のソロ演奏及び各地の二胡愛好家との合奏が実現した事は、今でも話題に上る。関先生も演奏後に感激し「桜花如雪、寒梅沁芳。雲漫富士、氣呑長江。琴韻交匯、音融声祥。高山流水、天籟回響。」との詩をまとめ、成田空港で渡してくれた。翌年、上海芸海劇場で日本二胡振興会主催した「2006・二胡縁 in 上海」日中文化交流コンサートの時に、関先生が140名の日本人二胡愛好家と「良宵」、「北京有個金太陽」、「賽馬」を合奏したことも、参加者の皆様はまだ鮮明に記憶してくれていると思う。

関先生は世界各国でコンサートを開催し、多くの人々に愛され、様々な名誉と肩書きがあるにもかかわらず、日常生活はとても謙遜、素朴である。長年の付き合いの中で関先生からの物質的な要求は一度もなく、宿泊ホテル、移動用の車、食事など自ら求めたこともない。スタッフたちに対していつも優しく、余計な要求も見たこともない。それも関先生に対し感心する一つである。その逆に舞台上で演奏する関先生はスケールが大きく、小さい二胡のパワーも強く、時には繊細で時にはユーモアがある。2008年「楽縁・武楽群来日20周年記念リサイタル」に関先生が「源遠流長文脈同、一衣帶水史相通。奚琴雅韻鐘俞会※、友誼和平展浩空。」との詩を作って、有名な書道家に依頼してわざわざ贈ってくれたので、私の家宝になった。皆さんも関先生の詩を読んで、何故あのような大きなスケールの演奏ができるのかがなんとなくわかりではないだろうか。

24日関先生の告別式には出席できなかったがその偲ぶ気持ちを込めて、追悼の言葉に綴じた「長江水痛挽一代二胡皇后不在、富士山悲謳絶世天籟之音永存。」関先生の二胡音楽は一つの時代であり、中国だけではなく、日本及び全人類の文化遺産である。

※奚琴：二胡昔の名称

鐘俞：鐘子期=中国春秋時代の音楽鑑賞の名手 俞伯牙=同じ時代、古琴演奏の名手